

和泉 JASPO 大会長

「外来患者への関与ますます重要に」

日本臨床腫瘍薬学会学術大会2013では、理事長講演のほか、大会長講演「がん医療と薬剤師」、市民公開プログラム、シンポジウム、関連学会との共催企画、オンコロジーフォーラムシ

ストセミナーなどが行われた。また一般演題としては口頭発表が30題、ポスターが82題。それぞれに初學者コーナーが設けられた。展示会場では機器展示、ブース展示の他、初級者向け医薬品ミニレクチャーが行われた。ランチョンセミナーは7題。

和泉啓司郎大会長はがん医療の状況・問題点、諸外国の状況、薬剤師の役割と期待について講演し「経口抗がん薬の発売によって外来患者への薬剤師の関与がますます重要になってきた。米国においても2012年に承認された抗がん剤13品目のうち7つが経口。おそらく日本でも同じような状況。在宅医療でも開局薬剤師との連携がますます重要になっている。医療の問題を解決するためには、チーム医療における専門薬剤師による共同・連携薬物治療の推進が必須。今後、がん医療を推進するためにより専門的な知識をもった薬剤師の養成も必須になる。」

ASPOでは外来がん治療認定薬剤師を認定していく」と講演した。

市民公開プログラム「がんと上手に取り組むためには」は3名からの講演。「心の痛み―がんと上手に取り組む」内富庸介氏（岡山大学大学院医歯薬学総合研究科精神神経病態学教室教授）、「揺れるこころ―がん闘病を経験して」本田麻由美氏（読売新聞東京本社編集局社会保障部記者）、「がん患者さんをチームで支える！―薬剤師の役割―立松三千子氏（名城大学大学院薬学研究科准教授／愛知県がんセンター中央病院長薬剤部）。

シンポジウムは3題。「薬業連携―経口抗がん剤の院外処方せん発行に際し薬剤師がどのような介入を行うべきか―」臨床研究をはじめのために―基本的な手法と研究の実際―「乳がん外来で薬剤師の職能を発揮しよう！―薬剤師に何ができるか、何が求められているか」。共催企画では、シンポジウムと教育セミナーが2席ずつ行われた。シンポ「在宅医療における栄養療法―がん患者を中心に」が全国薬剤師・在宅療養支援連絡会との共催、「がん診療におけるチーム医療の現状と展望―

乳がん薬物療法を中心に」は日本癌治療学会との共催で行われた。教育セミナーはそれぞれ、日本臨床腫瘍学会、日本緩和医療薬学会との共催。

一般演題から優秀賞が選考され、17日、次の通り発表された（演題番号、演題、発表者、所属）。

▼口頭発表・最優秀賞

O111「My5-FUの活用によるカペシタビンの薬物動態に基づいた至適用量設定への試み」榎原克也氏（国立病院機構大阪医療センター）

▼口頭発表・初級者優秀賞

O114「デノスマブ適正使用を目指した処方鑑査フローチャートの作成とその運用」山本千秋氏（北海道大学病院）

▼ポスター発表・最優秀賞

P160「自家末梢血幹細胞移植併用大量化学療法MCEC療法における悪心嘔吐発現状況」渡部大介氏（国立がん研究センター中央病院）

▼ポスター発表・初級者優秀賞

P104「進行・再発乳癌におけるエリブリンが及ぼす効果および毒性に対する相対用量強度的検討」堤大輔氏（日本大学医学部附属板橋病院）

▼症例検討・最優秀賞

O1119「アンスラサイクリン系薬剤による心筋障害によりバンコマイシン濃度が異常高値となった一例」山内弘子氏（杏林大学医学部付属病院）

総会

16日には一般社団法人日本臨床腫瘍薬学会平成25年度総会が開催された。山本弘史氏（医薬品医療機器総合機構）が議長、牧野好倫氏（国立がん研究センター中央病院薬剤部）が副議長に選出され、議事を進行した。

正会員数は662名、出席会員、委任状提出数の合計は定足数を超え定時総会は成立した。

平成24年度事業報告、会計報告、会計監査報告、平成25年度事業計画、収支予算が承認された。午前中の理事長講演で公表された一般社団法人日本臨床腫瘍薬学会認定制度の創設および研究助成の実施について説明があった。また、学術大会2014に関する報告もあり、いずれも承認された。



議長団